

〈第32回学会大会(大分大学) 基調講演〉

## 障害者スポーツからのメッセージ

——太陽の家37年の歩みを通して——

吉 永 栄 治\*

### The Messages From Disability Persons' Sports

——Through the 37 years' history of "Japan Sun Industries".——

Eiji YOSHINAGA\*

太陽の家の事務局長という肩書きで、吉永と申します。学会というのは初めてでございます。学会というのはもともと相当理論的に物事を順序立てて話さないかんとおもうのですが、私は1番それが苦手でありまして、実は原稿がないわけでありまして。原稿が無いことはもうこれほど性格がアバウトですから、何のお話が出てくるかわかりませんが、ご理解を頂きたいと思っております。太陽の家は、施設をだいたい14くらいもっていますから、いろんな障害をもった方が施設にいらっしゃってられるわけです。たぶんそんなアバウトなやつがどうやって施設を統括してるのかって言われるんじゃないかと思っておりますけども、たくさん、約50名ぐらいの職員を抱えていますから、まあ、そういった人達に支えられて今日あるわけでございます。

昭和40年ですか、太陽の家の誕生は。ここにいらっしゃる学生さんは一人も生まれていませんね。今年で37年目になります。先ほどのお話では本学会が32年ということでございますので、この学会が始まる前から太陽の家は存在し、福祉やスポーツやレクリエーションなどを進めていけば人間らしい生活ができるということをいろいろ実践してきたところでございます。

話が下手なので、スライドを用意してきております。それを見ながらお話を申し上げたいと思っておりますが、スライドを選んでいたら「そんな古いスライドを持ってきて何を話すんですか」とうちの職員から言われまし

た。けども、「古いものほど価値がある」私はそう思ってます、古いスライドを持ってきましたのでこんな昔からこんなことをやっているということについてお話を申し上げたいと思っております。

#### ●「太陽の家」創設の経緯

「世界中にこういった障害者がたくさん集い労働できるようなところがあったらいいなあ」という希望も含めて昭和40年に「ジャパン・サン・インダストリーズ」という形で太陽の家が発足いたしました。

太陽の家という名前は作家の水上勉さんが付けた名前です。太陽の家が始まった時は、「日本における人的機能開発センター」ということで始まったわけですが、「どうもそれじゃあ社会向きがしないよ」ということで、作家の方が太陽の家という名前を付けたほうがいいのではないかということになり、太陽の家となったわけですね。

なぜ、太陽の家が別府の亀川というところにあるかというと、太陽の家を考えられた中村裕(ゆたか)というお医者さんが、現在太陽の家がある亀川の隣に国立別府病院というのがありますが、その整形外科部長をされておられました。その国立病院の隣に、小野田セメントの結核療養所というところがあるのです。セメント会社には塵肺で結核患者が多かったんだと思うのですが、もう昭和40年代は、結核患者はいま

\*社会福祉法人太陽の家 Japan Sun Industries

で全部がら空きになっていて、そこを借りて障害者の作業所を始めようということで始めたのが亀川です。実は温泉があるとか、別府は保養所だから障害者にいいんだろうとかそういうことでは全然無い。たまたま作った人がその隣の病院の先生だったということがございます。

左はシンボルマークでございますが(写真1)、太陽の家は太陽に向いている。麦は書いてあるように踏まれても踏まれてもグングン成長する、太陽の家に向かって伸び続ける麦のように頑張っていこうではないかというのが、そこに集まった障害をもった人達の合言葉でありました。昭和40年代になりますと、私は43年に入りましたけど、だいたい車椅子とか脊髄損傷というのは社会的に見れば病人ですね。レジャーとかレクリエーションとか仕事とか、そういうのはまったくできない病人だというのが社会的な認知の状況でした。だからそういう人達が集まってきたわけなんで、まあみんな踏まれても踏まれても、社会のどんな圧力にも打ち勝って頑張っていこうじゃないかということ象徴として太陽の家は始まったわけです。



(写真1)

麦には  
きびしさがあります  
麦は踏まれても  
踏まれても  
ぐんぐん成長します  
太陽に向かって  
のびつづける  
麦の形には  
団結を  
意味するものが  
あります

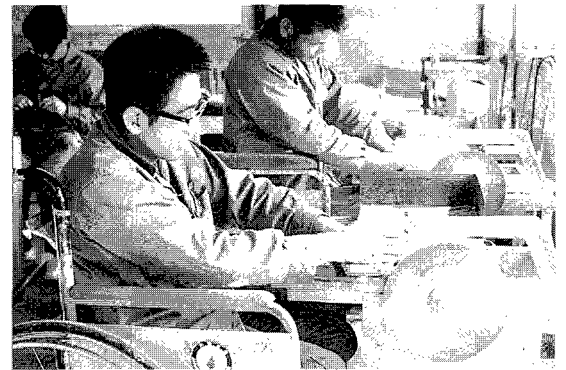
モットーは「心身障害はあっても仕事に障害は無い」、それから「仕事をして社会に認められる人間になっていこう」というものでして、全国から障害をもった人達が多数集まってきております。

#### ● 障害者に対する職業的自立を支援した草創期

集まってきて何をするのかということですね、これは昭和40年のことなのですが、当時アメリカに不良品を集めて再生して売るということを非常にうまくやっている障害者施設があったのですが、それを真似しようということにしました、仕事が無いから。

それで日本赤十字社に頼んでですね、日本赤十字社にボランティア奉仕団というのがありまして、全国組織で不良品を集めてもらって別府の亀川というところに全国から不良品の山が集まりました。集まったけども、再生できるのは何にもなかった。ほんとにボロしか昭和40年の始めには集まらなくて、直して売れるというものはほとんど皆無ですね。結局この事業は全国の支援団体に頑張ってもらえたけれども、水の泡にしたという歴史的経緯であります。そういうこともあって、実は太陽の家は集めているいろんなことをやったけども、飯が食えないんで仕方なく社会福祉法人の認可をもらうということになりました。そして、しばらくは政府から食事とかですね、寮の費用とかそういうものを援助してもらうことで、社会福祉法人の認可をもらって、現在社会福祉法人としてやっていっているわけがあります。

(写真2) 37年前でございます。この当時は竹細工の工場をしておりました。これは縫製工場でございますが、細々とデパートの洋服屋さんから縫製物をもたらってきて納品してほそほそと食いつないだということでございます。



(写真2)

これは木工場でございます(写真3)。私はここで働いてたのですが、ラワン材からやぐらごたつを作る工場でございます。ものすごいモーターの響きとほこりと汗で、とにかくまあひどい工場でございます、まったくお金がない時で、機械も補助金をもらってやったものですから、すぐに故障する、ほこりはかぶる、集塵機は無い、汗は出る、食事に行くときなんかはエアでみんなほこりを落としながらみんな食堂に行ったものであります。

そうやって重い障害をもって、脳性麻痺の人が半分

工場単位でとにかく全部飯が食えるようになろうということで、たくさんの方の工場という会社を誘致したんですね。

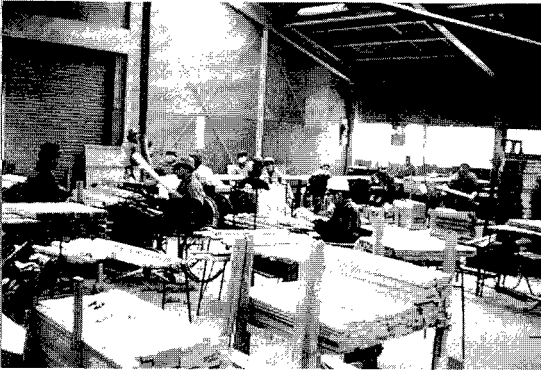
### ●「社会化」を促してくれたスポーツとの出会い

私は、昭和43年に太陽の家にきましたけども、車椅子に乗るようになって会社はクビになるし、体は動かないようになるし、どうして生きていいかわからない。そんなわけで実は太陽の家に来たわけなんです。それはみんなそうです。

車椅子の人っていうのは病人としてしか扱われないですから、仕事がなかったのです。前、勤めていた会社に前の仕事をするからと何度か言ったけども、それはとんでもない。病人を雇えないというのはその当時の考え方でございまして、そういう人達が太陽の家にたくさん集まってきたわけです。仕事をやり、その時は土曜日は半分仕事してましたから実質的には日曜日だけが休みだったわけですが、やっぱりスポーツをやったり、レクリエーションをやったり、つまり人間らしい生活するにはどうすればいいかということで、創業された中村先生は、日本で初めて障害をもった人達のスポーツというものを導入されたわけでございます。ですから、太陽の家では創業以来ですね、始めた時にはすでに体育館がございまして、プールがございまして、人間が働くからには余暇活動といいますが、スポーツやレクリエーションが必須のことだと、当初から施設整備を進められたということでございます。

当然のことながら、スポーツは自分ではやりきれないし、私もそうですが、車椅子バスケットというものを太陽の家にきて初めてみんながやっているのを見て、少し両手が元気そうだからお前もやれよと引っ張りこまれて、それから車椅子を走らされる、ボールを投げる。最初は、車椅子のままだと腰がきかないから、リングにボールが届かない。そして、毎日毎日仕事が終わってから体育館に呼び出されて、先輩に鍛えられてバスケットを始めたわけでありました。

(写真5) バスケットはルールがあるから、まずルールを守らないといかんということですね。障害をもった人っていうのは、僕なんかは途中障害ですが、生まれたときからの障害をもってるっていうのは、やはり社会のルールとかですね、会社のルールとか、学校のルールとかっていうのはなかなか理解しづらいと言



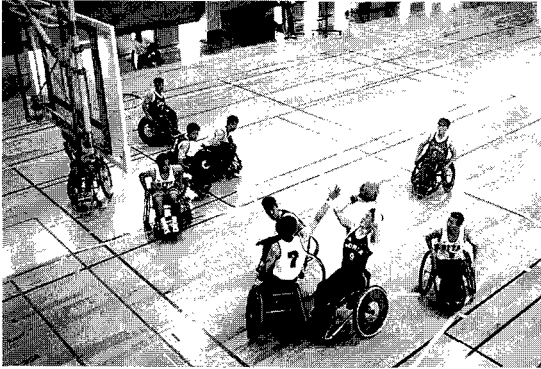
(写真3)

くらいはいましたけども、そういう人達がそういうやぐらごたつを作ってなんとか生き延びようというか、食事だけは確保しようということを一生涯懸命努力したわけでございます。神棚もつくってまして、神棚を作って金箔を貼ってですね、神棚をつくってありました。これは印刷工場ですが(写真4)、印刷は今どこでも日本の障害者の人達がやっていますが、やはり簡単な印刷を町に営業に行くと印刷も細々とやっていますという状況でございます。当時、障害をもった人達の職業訓練というのはですね国レベルでも、県レベルでも、行政レベルでも、ほとんどが印鑑彫りか時計の修理か洋裁かそんなやつですかね。そういうものが職業訓練でありました。そういう職業訓練を、どんなにたくさんの人にやってもですね、100人に1人もなかなか店を持ってないですね。時計の修理屋さん、修理をどんなにうまく技術を磨いてもその人が時計屋をやるとなると、視力とかがあるだとか、営業力があるだろうとか、商売に向いてるだろうとか、そういうもろもろのことがあるんで、なかなか自立に結びつきません。だから、太陽の家は工場単位で社会復帰しよう、



(写真4)

ますか、そういう環境になかった人達が多いわけですね。だから、スポーツではルールがあるからまずルールを守らないとゲームができないっていうのがあるんですね。だから、僕はスポーツをやるってことが一番人間を元気にするし、社会人にするのに非常に有効だと思っています。



(写真5)

これは自分の経験ですが、私はバスケットでそういう鍛えられ方をして、その当時の病人吉永が社会人に少しずつなっていくってことは、バスケットをやったということでごさいます、大会が九州大会、全国大会いろいろ大会がありますから少しでもですね、去年負けたチームに来年は勝ちたいとみんな思うわけなのですね。それが向上心を生む。向上心を生むということが実は知らず知らずのうちに体力がつくわけですね。体が元気になってくる。人間は元気になってくると不思議に、誰かが言ったように「心まで元気になってくる」と、それを身をもって体験した一人であります。

私は25の時に車椅子に乗るようになりましたけども、実は学生の時に嫁さんもらってましたから、嫁さんがいた。仕事があった。家もちろんあったわけですが、車椅子に乗るようになって、脊髄損傷ということになって、一度に全部をなくした。障害をもつてことはそういうことなんですね。嫁さんには逃げられるは、会社はクビになるは、体は駄目になるは、シヨンベンしかぶるは、うんこはなかなか出らんは、下剤飲んでもなかなか出らん。つまり、体がまったく駄目になった。こういうものが一度になくなるということが障害をもつこと、中途障害者っていうのは全部そうなんです、そういう状態ですね、何度「元気を出さない」っていくら親や兄弟や親戚に言われたって元気は

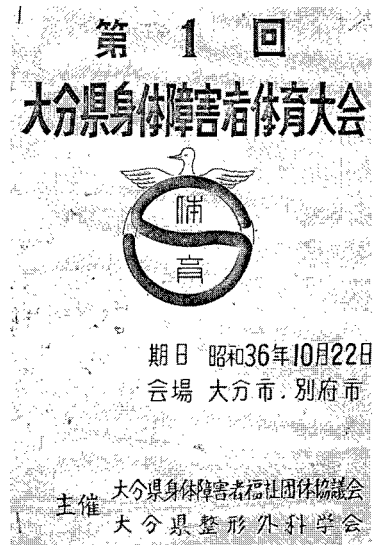
出やしないですね。

太陽の家に来て、そうやってバスケットをやらされたわけですね、当時ね。私自身がスポーツマンじゃないわけですから、スポーツが面白くてじゃなくてやられていわれてやらされて、やってみると面白くなる。面白くなるとだんだん体が丈夫になってくるので、するとやっと社会人に近づいてくるというんですか、そういう経験を23年間ずっとしてきた。だから、それはレクリエーションやレジャーというよりも、私なんかはやらされたってことです。バスケットをやっていると面白くなるので積極的になる。私は三流の選手です。一試合に2本くらいシュートが入れば良いくらいですから、いよいよ三流の選手でしたけれども、そのバスケットが私自身を助けた。私自身を育てたのはバスケットであると思っています。バスケットをやったから今日の自分があるということで感謝しております。だから仲間を感謝し、私を育ててくれた中村先生に感謝し、そうやって少しずつ自分をスポーツによって育てられたということを非常に有難く思っているところでございます。

## ● 障害者スポーツのムーブメント発生

### ～アジアの先進地、大分県

(写真6) これは日本で初めて都道府県単位の身体障害者体育大会が行われたときのものです。昭和36年ですか。大分県が一番最初だったのです。中村先生がいっぱいしゃつたからのことなんです、大分と別府市



(写真6)

が会場で開かれました。ほとんど病院と施設から選手が出てきてスポーツ大会をやったということでありました。

(写真7) これは東京パラリンピックのポスターなんです。東京パラリンピックは昭和39年でしたけども、その後ですねパラリンピックが開かれて日本の障害者スポーツが認知され始めたのは、いわゆる厚生省が障害者のスポーツをやるということはここから始まったわけで、障害スポーツの原点はここにある。昭和39年、1964年のことでもあります。



(写真7)

(写真8) これは、大分で行われたFESPICという福東南太平洋スポーツ大会でございます。第1回は1975年に始まりましたけども、これは大分が開催地です。その後、オーストラリア、香港、インドネシア、そして日本の神戸でありましたけど、それから中国、タイ。そして先年、先月韓国の釜山で大会が行われた。8回

Far East and South Pacific Games for the Disabled (FESPIC)			
	参加国	参加選手	
1975年	日本(大分)	18	973
1977年	オーストラリア(パラマッタ)	16	430
1982年	香港(沙田)	23	744
1986年	インドネシア(スラカルタ)	19	834
1989年	日本(神戸)	41	1,656
1994年	中国(北京)	42	2,081
1999年	タイ(バンコク)	—	—

(写真8)

吉永：第32回大会基調講演「障害者スポーツからのメッセージ」

大会だと思いますが、第1回の大会では中国は出てきませんでしたね。1975年には「中国にはまだ障害者スポーツなんか無いよ」ってことでまだ出てこなかったみたいですが、90年には北京で大会を開きました。北京にしたのは中国でオリンピックを誘致してありましたけども、「こんな障害者の大会もできるよ」と中国は見せるために、このFESPIC大会が誘致されて、中国の一番大きな陸上競技場で開かれました。

(写真9) これは私ですね。大分で開かれた第1回の大会ですが、三流選手の私が3日前に「お前が選手宣誓だ」と言われて選手宣誓をしたわけでもあります。なぜ私が選手宣誓をしたかという、昭和50年の4月に統一地方選挙というのがあって別府の市議会委員に私が立候補してですね、日本で始めて障害者の立場で当選したんです。そういうことがあってですね、「とにかくお前がやったほうがいい」と言われて、選手として三流の私がちょっとかっこ悪かったんですが選手宣誓したわけです。その時に言ったことは、「それぞれの競技で出る選手たちは自ら障害を克服して、アジアという地域の中で共に頑張っていこう」ということを選手宣誓したのを覚えております。



(写真9)

### ● 障害者スポーツの大いなる発展可能性

障害スポーツは、競技スポーツとレクリエーションスポーツに大きく分かれておりますが、非常に競技スポーツが盛んになってきたと思っています。私はバスケットで育ってきましたけども、バスケットが最も日本の障害者のスポーツで盛んになった。しかも、日本で最初に、日本車椅子バスケットボール連盟というのが組織されており、日本全体で組織された最初のゲームというのはバスケットボール競技でございます。で

すから、当時障害をもった人の有能な人っていうのはほとんどバスケットをやってまして、バスケットボールから発生して車椅子のまちづくりとか、昭和41年に福祉モデル都市っていうのを国が決めたんですが、そのころ活動したほとんどバスケットの選手が、各地に行って、とにかくトイレを作ってくれだとか、歩道の段差をなくしてくってっていうのを日本中で活躍したのでありまして、バスケットをする以外にそういった社会的な経験もいろいろやってきました。

その後バスケットは日本で一番古い組織ですが、この8月末に北九州で世界選手権というのを誘致しましたけど、アジアで初めて車椅子バスケットの世界選手権というのが開催されました。日本の男子チームは10位でしたけれども、女子チームは4位になって、だいたい日本の選手もレベルとしては世界に追いついています。10位くらいではまだまだ駄目ですが、女子は強いですね。女子はシドニーでは銅メダルを取りまして、北九州では4位でしたけども、強くなってきている状況がございます。

(写真10) これは、車椅子バスケットボールの次に開発されたツインバスケットボールという競技でありまして、リングは2つあります。これは低いほうのリングですね。だからボールが高いところまで飛ばない障害をもった人たち、いわゆる頸椎損傷の人たちがこの競技をやってまして、日本でだいたい50チームくらいが今存在しています。障害が軽い人は普通のリングにシュートするし、頸椎損傷でボールが飛ばない人は低いリングにします。それも今、日本選手権が待っておりまして2003年の6月の日本選手権は別府でやろうと決まっておりますが、それには三笠宮殿下がご出席されるということになってたんですが、先だってご不



(写真10)

幸があつて大変残念に思っています。この競技は日本から発生して世界に広めていこうという競技でありまして、今はまだ日本だけしかやっておりません。頸椎損傷の人たちのスポーツとしては、非常に優れていて面白いんじゃないかということで相当普及されています。

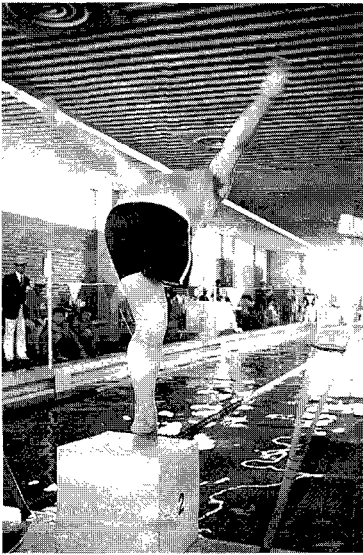
(写真11) これはアーチェリーですね。アーチェリーは一般の人たちと全く同じですから、一般の国体にも車椅子の選手がたくさん何人も出ているという状況ですから、これは特に障害スポーツというよりも、一般に近いんじゃないかと思います。



(写真11)

(写真12) 水泳もあります、これはまあまさに大会になれば秒を争うという競技なので、普通の器具を全く何も使わない競技です。一般のやり方とまったく変わりはないです。ただ、なかなか練習する会場といえますか、プールがないんで、それほど多くの人たちが参加しているわけではありませんが、今各県にはだいたい2つか3つはプールができてますので、かなり水泳の人口が増えているのが現状であります。

(写真13) テニスですね、これも非常に競技化されてまして、今ではテニスや卓球をやっている選手が国際大会に出に行くにはですね、世界のランキングに入っていないと受け付けてもらえないというくらいに、競技性が高まってきたということです。パラリンピックとかいう大会にはなかなか出れないっていうように時代が変わってまいり、競技性が非常に強くなってきたということがございます。



(写真12)



(写真13)



(写真14)



(写真15)



(写真16)

(写真14) これは卓球ですね。健常の卓球ってのは中国が強いんですけども、障害卓球っていうのは日本が強く、だいたい日本から行く選手は必ず金メダルをとって帰るっていうくらい日本は世界的に優秀な選手が多いというのが過去の実績です。

(写真15) これはカヌーですね。カヌーも最近、特に大分の大分川で日本選手権とかやってますので、大分が全国でも障害者のカヌーが進んだ県だと思っております。

(写真16) これはローンボールです。こういう新しい競技ですが、日本に最近こういう、スポーツにほとんど関係なかった障害の重い人たちが、最近のいろん

な種目の増加といいますか、新しい障害者のためだけに規則を作った競技種目がたくさん出てきましたから、たくさんスポーツに参加するようになってきたというのが最近の状況でもございます。

(写真17) これは、車椅子マラソンです。今年で22

回目になりましたけども、大分国際車椅子マラソンというのは車椅子だけの競技としては、世界最初でしかも世界最大でございます。



(写真17)

(写真18) このレースに勝つために1年中車椅子のレーサーは練習しているというのが世界の選手の状況でございます、ハイツ・フライという選手が今年10連覇しましたけども、10連覇もした選手っていうのは選手のみならずやっぱり尊敬される。それだけ練習しないと、もはや優勝できないくらいレベルが高くなっています。大分でも数名のセミプロがいますが、仕事はだいたい3時くらいまでしかなくて、3時からやっぱり走るだけ走って、外国に走りに行く時の費用は全部航空会社持ちで、スポンサーがついています。彼らは「仕事のために走る」と言っていますが、そういう人たちでもなおかつ勝てないハイツ・フライはまさに世界一のランナーです。とびぬけた体力もなく、とびぬけた運動神経でもない、普通の選手だと思いますが、彼は10時から練習するそうです。この10年間この大会では負けたことがない。パラリンピックでは負けますが、大分では負けたことがない。そのくらい、



(写真18)

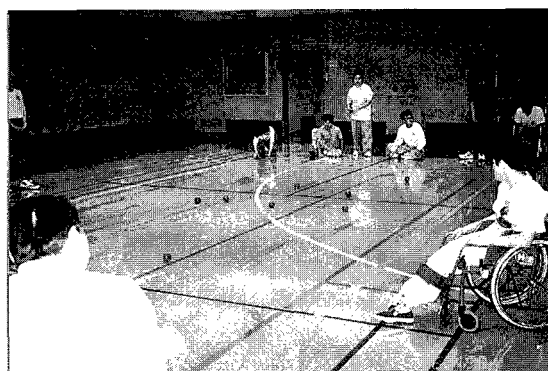
この大会に強い選手で世界の当然プロのランナーでございます。障害をもった人でも、そういったプロのスポーツ選手が出てくるというのは、私たちがスポーツをはじめて37年ですが、「そういう時代に入ったんだなあ」というふうに思います。

### ● 障害者スポーツからのメッセージ

～スポーツは人を強くしてくれる「福祉」活動なのだ

今までは競技スポーツの話でした。これからはレクリエーション・スポーツですが、例えば電動車椅子でサッカーを大きなゴールで楽しんでいます。

(写真19) これはポッチャという競技です。昔の我々がビー玉をやったような、その近くに玉を転がすというような競技でございます。



(写真19)

(写真20) これは、フライングディスクです。あの穴の中に入れる。犬によく噛ませるようなフライングディスクでありまして、まさにレクリエーション・スポーツの典型であります。これも日本選手権みたいなものもやっていますが、どんな障害でも楽しめるレクリエーションスポーツに最も適した競技であります。



(写真20)



(写真21) これは卓球バレーでして、ゴロ卓球です。卓球は網の上から玉を出すんですが、これは網の下から玉を出すという形でどんな障害の人たちも1チーム6人で楽しめる京都の国体で定まった非常に重度障害者向けのレクリエーション・スポーツでございます。



(写真21)

先ほどお話しましたように、重要なのは「日常のスポーツを大会化していく」という作業こそが社会での強力なアピールにつながると思うし、障害をもっている人々への理解を深めることになる。さらに障害をもっている人々の力を再認識してもらう一番いい機会になるのじゃないかと思っています。

太陽の家というのはいわゆる福祉をメインに掲げていろんな行事をやり、社会的な活動をやっているのです。学生さんも福祉の学校に行っている人がたくさんいらっしゃると思いますけども、先ほど言いましたように、スポーツというのはですね、どうも私の体験からしますと、人間を元気づける最も大きな源ではないかと思っています。

第1回のFESPIC大会で中村先生が閉会宣言をしましたが、その時おっしゃったことは、「人間にとってスポーツは最も大切だ。しかしそれ以上に大切なことがある。それは仕事だ。」と言って閉会されました。障害をもった人々たちにとっては、まず食べることが先決ですね。先ほど、会長の先生がおっしゃったように産業改革が難しい時代ですが、やっぱり食べて豊かであるというのが人間の前提ですね。障害をもった人はなおさらです。仕事があるかどうかということは、まず1番の前提でございまして、まず仕事をしよう。収入を得よう。そして、それが叶えばスポーツをやる、レクリエーションをやるということなんです。

で、実はどっちがどっちかということになると私の場合は、むしろスポーツをやったから今日を得ました。仕事をやったからじゃないです、私の場合には。バスケットをやって体力を得、バスケットで仲間を増やし、バスケットで生き方を学びました。だからスポーツと仕事とどちらが大切かと言われると、それはわかりませんが、私は太陽の家という職場があったからスポーツが得られました。だから福祉というのはですね、人間が生きがいをもつためにですねどういうプロセスを通るかということなんですね。障害者だから福祉が必要だということではない時代に入ったと思ってまして、人間としての生きがいをどう捉えていっていかってというプロセスが福祉だと私はそう思っております。

それぞれの人が自分の体験や自分の観点の中で、それぞれ生きがいを見出していくということが必要なわけで、今日難しい時代になりましたけども、もはや障害とか健全とかって分ける時代じゃないですね。たぶん障害をもった人々よりも健全な人は、リストラされている率は高い。私どもが提携している関連会社なんかでは本社で2万人首切ろうと言ってるわけですが、太陽の家は今リストラまったくやっていませんから障害をもった人は安定して仕事をやってます。健全な人々のほうがむしろ厳しい社会になってるかもわかりません。それぞれ、自分の生きがい、自分の人間性がいかに尊重されるかというのがこれからの大きな社会のテーマだと思っておりますが、それを志すのが福祉なのじゃないかと思っています。

たくさんの企業にご支援を頂いて太陽の家をやってありますが、そういう面で人間がどうやって大切にされていくか、人間がこの社会に生きがいを持って生活できるかということを実践してますので、どうぞ一度ですみねび、こんな話聞くよりも見たが一番ですね。太陽の家に来てみてですね、そこで一人一人が何を感ずるか、一人一人が何を自分のものとしてできるかということが、これから生きるうえで非常に大切なことだと思っています。私は今年62歳になりましたけども、ほんとに先ほどもいいましたようにスポーツで今日いろいろ勉強させてもらいました。スポーツになんか恩返しできないかいつも考えておりますけども、そういう形で多くの仲間の人たちと一緒に少しでも障害のある人々の社会的な地位の向上という面では頑張っていこうと思っています。

どうぞ今後とも街で障害をもった人たちを見かけたら、声をかけてあげて、少しでもたくさんの仲間を作ってください、少なくとも障害をもった人たちと仲間になるということはなんらかの形で支援になると思

ますので、一つよろしく地域社会でご支援をいただけますように心からお願いして簡単ですが終わりたいと思います。

ありがとうございました。